



明石市立
文化博物館

文化博物館だより 第170号

2007年6月23日

みなさん、こんにちは。いよいよ小原実知成展の閉幕の日が近づいてきました。

● 第5回 小原先生に聞きました。

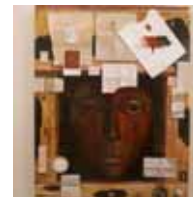
今回も前回の続き。小原先生の表現スタイルを変える事件についてです。

横の2枚の作品。これは阪神淡路大震災で亡くした画家仲間の大島幸子さんをイメージしているそうです。絵の具やたくさん
の貼り紙が、画家であった彼女の住まいを想像させます。

また震災まもなくの長田には壊れた家の前などには「生きて
います」「ここにいます」と避難先を記すメモがたくさん貼っ
てありました。その光景もこの絵に重ねあわせているそう
です。

よく見ると、1枚目は左目に消された涙の跡が残っていますが、2枚目にはありません。色合いも異なります。先生の心境
の変化を示しているのでしょうか。

「寡黙の人」というタイトルの作品は2000年から2002
年にかけて数枚制作されました。女性像も男性像もあります。
このことについて小原先生は「寡黙でほとんど喋らないが、絵
の中ではたくさん話している。言いたいことが心の中にたく
さんある」と語っています。この女性の目も口元も、今にも何か
を語りだしそうに見えます。



「Monologue」(1996年)



「寡黙の人」(2001年)



「寡黙の人(M)」
(2001年)

生と死について考えさせられる作品が並ぶ小原実知成展ですが、小原先生自身はとても
和やかな雰囲気を持ち主です。奥様と仲良しで、週末はご夫婦おそろいでお越しください
ました。小原先生のお話を伺って、とても「体験したこと」を大切にされる方だと感じま
した。作品のモチーフとしてだけでなく、会話をするときも、他者の経験をとても尊重し
ておいででした。

ミニ連載「小原先生に聞きました」は最終回となります。少しでも作品鑑賞のご参考
になりましたでしょうか。この連載では小原先生にご快諾いただき、作品の写真をたくさん
掲載させていただきました。ありがとうございました。